二十三年目の別れ道

逸見晴恵

はじめて明かす夫・逸見政孝の闘病秘話とそれからのこと

フジテレビ出版

二十三年目の別れ道
はじめて明かす夫・逸見政孝の闘病秘話とそれからのこと

平成6年11月10日　初版第1刷発行

著者　逸見晴恵
発行人　村上光一
発行所　株式会社　フジテレビ出版
東京都新宿区河田町3-1
発売　株式会社　扶桑社
東京都新宿区市谷台町6番地
電話 03(3226)8880（代表）
印刷所　大日本印刷株式会社
定価はカバーに表示してあります。

乱丁本・落丁本は、扶桑社販売部(書籍)宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

©Harue Itsumi 1994 Printed in Japan
ISBN4-594-01585-9

二十三年目の別れ道

逸見晴恵

目
次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

プロローグ 9
第一章　ガン宣告、そして運命の手術 23
第二章　マジメとケセラセラ 59
第三章　命への挑戦 103
第四章　暗転 165
第五章　逸見の遺産 215
あとがき 233

表紙撮影 ――――― 増田岳二

扉写真撮影 ――――― 秋元孝夫

スタイリスト ――――― 石田純子(オフィス ドゥーエ)

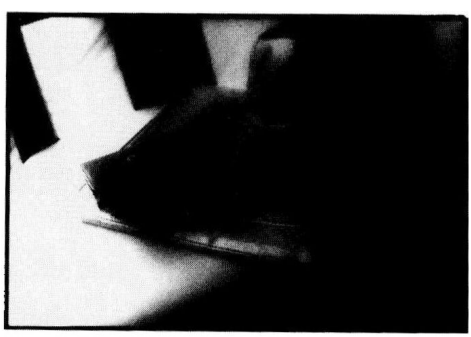
ヘアメイク ――――― 金子義幸(GORO)

装丁 ――――― 小栗山雄司

衣装協力　セーター、ストール／ユキ トリヰ(トリヰ)
イヤリング／クレーベル

主人が天国に召され、早くも一年が終わろうとしています。
逸見がガン告白記者会見をして以来、「癌」という病気について改めて考えさせられたというご意見も多く、検診の数も増えたと聞きます。
私たち家族は、末期医療がはたしてあれでよかったのか、いまだに疑問を抱いて、苦しみ、そして悲しみに沈んでいます。
しかし、それは私たち家族全員の反省です。もはや死者が帰らないのなら、だれを責めましょう。
いろいろ、考えそして事実をたどることは、私の責任であり使命と考えました。
心の記録を書くことは、この闘病を見つめることです。それがあって、私は世の中傷や批判に耐えてきました。
そして一年、正直を貫いた逸見に、恥じないと確信できて、この記録をみなさんに読んでいただきたいと思いたちました。
どうぞ、私たちの闘病、その三百四十二日を知ってください。

プロローグ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今日も元気だ。仕事ができる

前を向いて、人の素晴らしさを信じて、そのまま努力してきた逸見は、「今日も元気だ。仕事ができる」と四十七年間、毎朝、ほがらかに笑ってきた。

「あーら膝が取れてた。ちょっとちょっと待って、アイロンかけるから」

はこうとしていたズボンを取ると、

「なんだ、駄目じゃないか」

と厳しい逸見の叱責が飛ぶ。

アタフタとアイロンをかけている間、不機嫌に新聞を読んでいた逸見も、ズボンをはいて、鏡に向かって服装点検を始めると、いつもの顔になる。

「シャツよーし、パンツよーし。ネクタイよーし」

ベルトの穴を通し、ギュッとしめてすっくと立つ。

いつものように、満足げにニコッ。

「今日も元気だ。仕事ができる」

と晴々とした顔でオッシャる。
（よくまあ、あんな嬉しそうな顔ができるもんだ）
いつものことだが、あきれてしまう。家族や私に向かってこんな顔したことないじゃない。そんなに仕事が好きなの。
足取りも軽く、出ていく父親を、息子の太郎も娘の愛も、ポカンとして見送っている。
「パパみたいに楽しく仕事ができたら、最高だね」と太郎。
「フリーになってから、ますます嬉しそうね」と愛。
「仕事があるのが嬉しい。仕事場に行けるのが嬉しい。嬉しくってたまんないんだわ」
私は、いささか嫉妬がこもった声で言い放つ。
「それにしても、あのパパって、仕事の義務感とか、責任感とか、そんなものないような顔してるね」
と愛が独特の観察眼を働かして言う。
「今日も元気だって言うときはね、ただ仕事に行けるって嬉しいだけなのよね。でも、車のなかでは、もう違った気分でいるわよ。一本の番組には百人の人が係わってる。僕が頑張れば、百人が安泰。百人分の責任、重圧、それを引き受けるゾって、テンションあげてるのよ。けっこう大変なんだ」

と朝食の食卓を片付け始めると、
「それが男の仕事というわけだ」
と太郎。思わず太郎を見てしまう。アメリカの大学に留学して、勉強に追い立てられている息子も、そんなことを言うようになったか。
留学先から息子の太郎と愛が帰ってきたわが家。
一九九二年の暮れまではそんな日常が、ごく当たり前のように続いていた。

フリーになってから、仕事の幅はどんどん広がっていった。それにつれて、事務所の機能を持つ理想の家を建てることを決心した逸見。
その家が完成したのは、九二年の十月だった。
新築祝いは仕事仲間でもなく、親しくしている芸能人の方々でもなく、
「お世話になった工務店や職人さんとお祝いをしよう」
と逸見は、言いだした。
当日は職人さんが大集合。お料理も好評だったが、なにより職人さんが喜んでくれたのは、こういう催しを開いたという、そのことだった。
みなさんは自分の持分が済むと、次の現場に行ってしまうので、完成したものを見る機会が

なかなかないということ。
「ほう、こんなふうになりましたか」
「やはり、ここはああやって正解でしたね」
と、家のあちこちで写真を撮り、嬉々としておられた。
ほんとうによいパーティーだった。
その後、主人の高校時代の友人が集まって、心おきないお祝いのパーティーも開かれた。次はどんな方が訪れて、どんなときをごいっしょするのだろう。
逸見と私の思いは同じだった。
子どもも、難しい思春期を越えて、育ちあがろうとしている。そんなときに、父親は、子どもたちが育った二十年を、そのまま自分の基礎にして、新たな、決して人が真似のできない、個性を確立しようとしていた。
どんなふうに逸見は成長していくだろう。だれから、なにを学ぶのだろう。
これからなのだ。
私たち夫婦の未来には、希望の海が横たわっているように思えた。
そこを逸見は楽しげに、泳いでいく。
「今日も元気だ。仕事ができる」

とズボンのベルトをしめながら。
ああ、夢が次々に恐ろしいように叶っていく。
こんなにすべてが順調で、バチが当たらないのかしら。
なにを馬鹿なことを、とその度に打ち消して、新しい家で私は張り切っていた。
そして、年末の忙しいときを過ごして、ろくにお客様も迎えられないまま、次の年が明けた。

そして九三年、一月、逸見にガンの宣告がくだる。
目の前の雑事に追いかけられながらも幸せの手応えを感じる日常、その時間の流れさえ違ってしまう。昨日の平和な感覚を、そのまま思いだすこともできない。
世界が変わってしまった。
それは不安という灰色の世界、病魔の淵に立ち、無力で身の置きどころがないと感じる手応えのない世界だった。
「嘘だ」
「嘘でしょ」
誰彼かまわず叫びだしたい気持ちだった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com